

原子力空母と「トモダチ作戦」

選挙戦のさなか、梅林宏道『在日米軍—変貌する日米安保体制』岩波新書、2017年を読んだ。在日米軍のなかでも、「原子力空母とトモダチ作戦」に注目した。

ジョージ・ワシントン、ロナルド・レーガンを含め、米国の10隻の現役原子力空母(CVN)はすべてニミッツ級に所属する船である。2017年には、その次の世代の原子力空母ジェラルド・R・フォード級が5~6年に1隻のペースで就役を開始する。ニミッツ級CVNは熱出力が約60万キロワットとされる加圧水型軽水炉2基で動力を賄っている。電気出力100万キロワット(熱出力は約300万キロワット)の商業用発電炉の約5分の1の熱出力の原発が2基、東京湾に浮かんでいることになる。



東京湾に原発が浮かんでいることのリスクは極めて大きい。2011年の3・11東日本大震災による福島第一原発の事故は、発生確率の少ない事故であっても、原子炉の放射能放出は計り知れない被害と社会的影響を生み出すことを示した。米海軍は空母の原子炉の絶対的安全性を主張するが安全性に絶対はない。確率論も不毛である。何十年に一度の事故であっても、一度起こると数字では計算できない被害を生む。3・11のとき、ジョージ・ワシントンは母港横須賀に係留されていた。『星条旗新聞』は「津波の引き潮によって水位が6フィート(183センチメートル)下がり、揺れは非常に強くて船を埠頭岸壁から離すほどだった」という乗組員の証言を載せている。震源が東京湾に近かったとしたら、あるいは原子炉がまだ取水し冷却が必要な状態で津波によって横転したら、など、考えられる悪夢のシナリオは数多い。人口密集地に近い原子力空母の母港など選択肢になりえないことであろう。

それとは別の観点から、原子力空母は戦争任務を第一義とするプラットホームであることを思い出しておきたい。3・11の地震発生の瞬間、後に横須賀を母港とすることになる空母ロナルド・レーガンは太平洋を西に向かって航海していた。米韓合同軍事演習に参加するための移動であった。大地震を知ったロナルド・レーガンは12日に行き先を日本の本州に変え「トモダチ作戦」と呼ばれる救援活動に従事することになった。救援活動の洋上プラットホームになるとともに、搭載ヘリコプターによる救援活動が行われたのである。この活動によって救われた多くの命があることを思うとき、トモダチ作戦に感謝する気持ちを忘れてはならないであろう。この作戦で乗組員の多くが被曝し東京電力を相手取った訴訟を起こしていることにも注目したい。

「NNN ドキュメント' 17」10月8日放送は、トモダチ作戦による放射能汚染をテーマにしていた。— 福島第一原発の事故。汚染されたのは東日本の陸上だけではなく。実は、放射性物質の約8割は太平洋上に流れ込んでいたという。そして東北沖で“トモダチ作戦”として支援活動していたのが米空母ロナルド・レーガン。当時、艦内では放射能アラームが鳴り響いていた。乗組員の兵士らは今、続々と放射能による健康被害を訴え死者は9人に。そして米兵ら400人以上が東電などを訴えている。空母で一体何があったのか？



『在日米軍』を読み、このドキュメントをたまたま見て、背筋が寒くなった。でも、これが現実だ。多くの人に知ってもらうために、とりあえず紹介しておきたい。

(2017年10月19日)